

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 橋爪恵子

本論文はガストン・バシュラルの科学的認識論と詩学という異質な領域に関わる仕事の全体像を、彼が1930年代に展開した時間論を手掛りに読み直すことで再構成しようとするものである。バシュラルの時間論は、ベルクソンの「持続」に対する「瞬間」の時間論として知られているが、従来のバシュラル研究において時間論が十分に注目されてきたとは言い難い。本論はバシュラルの「瞬間」が科学論と詩学とを一つの全体へと媒介していると主張する。

本論文は全3部8章からなる。科学哲学者としてのバシュラルにとって、科学や言語による認識は持続を固定化するとしてこれを否定的に見るベルクソンの主張は認め難い。これに対抗するべくバシュラルは、成程科学や言語は観念によってベルクソンのような持続を切断し固定するが、それゆえにこそ観念はそれまで知られなかった現実のある位相を明らかにできるという。そしてこれまで常識と考えられてきた認識を切断し新たな発見を可能にするものこそ瞬間がもつ創造性だとして、瞬間の時間論と科学的認識論を接合する(第1部)。

この立場からすれば時間を持続と捉える見方も我々の精神がいわば無意識に作りだした誤ったイメージとして科学の進歩を停滞させるものである。そこでバシュラルは科学的認識を誤らせる起源としてのイメージ、とりわけ古代以来世界を構成するとされた四大元素(地・水・火・風)の詩的イメージを批判的に取り上げるが、それらは集合的無意識であり、従ってそれはイメージの精神分析の企てである。ところがイメージの精神分析は科学にとって障害とされた詩的イメージや芸術が実際には人を瞬間と創造に結びつけるものだという肯定的な評価を引きだすことでイメージの詩学への転換をもたらす。ここでも重要なのは「瞬間」の時間論と詩学との接合である。詩作品の中で連続する一つ一つの詩句は、それを単独に味わうその瞬間において人間が最初に世界を見つめた原初感覚を返してくれるが、これをバシュラルは「物質的想像力」と名指す(第2部)。

いまや詩・芸術と科学とは創造的瞬間と世界認識に関わるものとして、新と旧、瞬間と連続の「弁証法」を共通の構造としてもつ。彼はまた科学的仮説や実験における主体の関与と平行に、詩的イメージに関与する読者の側の「創造的意識」の重要性をも強調する。こうして本論はバシュラルを、瞬間と孤独に立たざるをえない人間がその限界を乗り越えて新たな認識やイメージの創造に関与することで他者と関わる可能性を見つめる思想家であったと結論する(第3部)。

本論文はバシュラルの思想の全体像を、彼の「瞬間」の時間論を媒介させることで極めて明快に描出することに成功している。科学と詩学が現実把握の二つの領域であるとして、科学が与える世界像と詩学がもたらす世界像とはどう違うのかといったさらなる問題はなお今後の課題として残るが、本論文は全体としてバシュラル思想の研究、とりわけ詩学や芸術論にあらたな座標を提供するものとして評価することができる。よって本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位を授与するにふさわしいとの結論に達した。